会　議　記　録

会議名称	第３回社会教育委員の会議
日　　時	令和２年11月20日（金）午後２時11分～午後４時05分
場　　所	分庁舎　５階　会議室（オンライン会議）
出　席　者	委員 小澤、朝枝、南、檜枝、赤池、天野、内山、笹井 区側 生涯学習担当部長、生涯学習推進課長、 社会教育推進担当係長（社会教育主事）、 教育連携担当係長（社会教育センター社会教育主事）、管理係主査
配付資料	＜配付資料＞ 1　令和２年度第２回社会教育委員の会議　会議記録（案） 2　次世代型科学教育の新たな拠点等の整備・運営事業者候補者の選 定結果について 3　教育ビジョン（教育振興基本計画）と審議会の役割について 4　すぎなみ教育シンポジウム2020 みんなで話そう！考えよう！　これから10年の杉並の教育 5　今期のまとめについて ＜参考資料＞ 1　令和２年度杉並区の教育 2　すぎなみ教育報　№237 3　それぞれの新しい日常を考えよう 4　炉辺閑話　№63 5　準常設展　杉並文学館 6　絵葉書から見る杉並 7　オンライン朗読劇　手ぶくろを買いに 8　社教連会報　№87 9　今後の生涯学習にかかる事業の展開に向けて－第14期杉並区社会教育委員の会議まとめ－ 10 新型コロナウイルス感染症感染拡大下での実施事業例
会議次第	Ⅰ　報告事項 1　会議録の確認について 2　次世代型科学教育の新たな拠点等の整備・運営事業者候補

	者の選定について 3　杉並区教育振興基本計画審議会の設置等について 4　すぎなみ教育シンポジウム 2020 について Ⅱ　協議事項 1　検討課題について (1)今期のまとめについて (2)次回に向けて 2　その他

（意見要旨）

○議　長　社会教育委員の会議を始めたい。部長からご挨拶を頂く。

（生涯学習担当部長　挨拶）

○議　長　次に配付資料の確認をお願いする。

（社会教育推進担当係長（社会教育主事）　説明）

○議　長　それでは次世代型科学教育の新たな拠点等の整備・運営事業者候補者の選定結果についての報告をお願いする。

○生涯学習推進課長　杉四小の跡地には次世代型科学教育の新たな拠点等を整備することになっており、民間事業者に建物等を貸し付け、整備・運営も委託する計画で、公募型プロポーザル方式により募集し応募があった。

選定委員会において審査を行い結果の報告を受け、事業者は株式会社コングレ（中央区日本橋）という国際会議場やホール、文化・観光施設を運営している事業者で、一次、二次審査を実施し、評価点数は合計配点数の7割を超えたので選定した。今後のスケジュールは、来年の1月から民間事業者改修部分の設計等を開始し、令和5年10月に開設を予定している。

○議　長　報告について、特に質問がなければ進めたい。それでは、杉並区教育振興基本計画審議会の設置等について。

○社会教育推進担当係長（社会教育主事）　新たな杉並区の基本構想を策定する審議会をスタートし、併せて教育振興基本計画を杉並区教育ビジョンと称しているが、教育基本法第17条第2項に基づき、新たに策定のための審議会を設置して検討をスタートした。現在の杉並区教育ビジョン2012が令和3年で10年という期限が迫るなか、次のビジョンを策定するタイミングに作るためのプロセスに位置付けられたすぎなみ教育シンポジウム2020が関わっているので併せて触れさせていただく。

○教育連携担当係長　現在の杉並区教育ビジョン2012は、教育委員会と学校や保護者、地域住民と一緒に作り「共に学び共に支え共に創る杉並の教育」というフレーズが生まれた。今後10年の教育ビジョンも子どもを含め、地域の意見を踏まえて作っていきたいというのが教育委員会の考え方だ。子どもの学びを地域が支えるのではなく、地域をつくっていく大人の学びはどう保障していくのか。ビジョン策定審議会座長から問題提起を頂く。パネルディスカッションはコミュニティスクールの向陽中学校運営協議会会長、進行は杉並区に事務所を置くNPO法人カタリバの代表理事にお願いをしている。

○議　長　次の協議事項「今期のまとめについて」に移りたい。

○社会教育推進担当係長（社会教育主事）　今日までの意見を踏まえた骨子案を作り、更に意見を頂きまとめの原案を作りたい。区民の社会教育活

動は現状のコロナ禍で悩みながら事業を行っている。行政あるいは教育委員会が全体としてどのような支援が可能なのか。それらの素材とこれからの議論で視点を繋げ、まとめができればと考えている。科学教育の事業展開も加わってきている中で、キーワードとなった「出前型・ネットワーク型」、つまり施設に集めて事業をするということだけではなく、施設の外側で人々の集まるところや身近な場所で事業展開を工夫するなど、進むべき方向を示す一つの言葉として出てきた。ところがコロナ禍で3密は駄目という状況になり、社会教育事業の得意とするグループワークも展開が図りづらくなってきた。この第14期のまとめを更新するならば、今のコロナ禍の状況をそこに載せて修正をしていく必要がある。事務局としては、生涯学習を人が密集、密着、密接に繋がることをモットーに進めてきた。郷土博物館はコロナ禍で、休館期間中にユーチューブで展示の画像を提供した。先日、郷土博物館の運営協議会がありオンラインで進めていくべきという考え方と、リアルにやっていかないと駄目ではないかという意見があり、コロナ禍での生涯学習や社会教育のあり方が問われている。オンラインに置き換えられたら郷土博物館や社会教育センター、大学もその場に行かなくてよくなってしまう。非常に危機感を持って生涯学習はどうあるべきなのか考えている。今期のまとめに議論していただきたい。

○副議長　参考になればと思い、美術大学での教育経験を案内する。絵を描く、石を彫る、物を使って作品を作るということがあるがそれをオンラインでやるのは、結構大変な出来事で自宅では大きな絵を描く場所がない。感染状況が落ち着いてからは、登校希望の学生は学校に入って大きな絵を描くとか、物を作る授業を実行してきた。今言えることは、両方やるしかないということだ。

○委　員　私は大学でオンライン授業を受けている経験をお伝えしたい。大学ではコンテンツとして共有や会話をする場所をどうつくるかが重要であって、流すだけでは難しいと思う。オンラインを環境整備といってハードを設置するのは結構だがやりながら試していくしかない反面、そんなに急がなくてもいいという感覚がある。社会教育についても顔を突き合わせてだけではなくオンラインで少しずつやるのも必要だ。やってみなければ分からない。

○委　員　郷土博物館の話だがユーチューブで見たから行かないということはないだろう。今まで足を運べなかった方たちが気軽に見て予習をし「本物が見たい」と足を運ぶ裾野が広がるのではないか。大学や学校に関しては、オンラインに向いている部分もあると思う。自分のペースで止めて考えて続きを見る。あるいは最初から見直すなど、学ぶ側の意志で学べるいい面がある。だからといって学校や大学は要らないのか。学校に行って友達や先生に会いたい。やはり人と会って話して学べることも渇望していると思う。今までは対面式で先生や親、国から教わり、早く学ぶということが推されてきた教育だった。これからＡＩが人の仕事に取って代わると言われ、更にコロナ禍で人が受付していたものが人形や機械になり、触れずに物事ができる。受け身の学びではＡＩに勝てないことが分かって危機感を持っている。そういう意味で言うと、子どもたちも教えてもらって学ぶのではなく、ＡＩに負けない考えを発信できる子どもたちを育てる教育に

変えていくべきだろう。講演会に関しては今月だけでも北海道、九州、福島や群馬、千葉などオンラインを使ってあちこちへ行けた。行き帰りの時間や宿泊を伴う出張がないので、スケジュールを詰め過ぎたら次の予定に備えて反省をしていた移動時間がなく、そういった時間も必要だと実感した。

○委　員　これまで自主的にユーチューブを使う学びや個別に知識を吸収して学びを高めることはできていた。コロナ禍によって著しく低減されたのは、人とのやり取りを自分の経験値として高めてどう共有するか。今、持っている場所の中でできる範囲で徐々に進捗し、伸びていけばいいのではないか。郷土博物館でユーチューブを使って流したら、それを見た人たちでチャットを使ってやり取りするとか、今度こういう企画が欲しいなど見た人同士で交流や情報共有ができるように変えていくといい。

○委　員　オンラインのいい面、悪い面はとても感じている。私自身が慣れず、隣にいる人の温かみや雰囲気を捉え切れず私自身は戸惑っている。団体さんの支援に関してだが、オンラインの環境を持っていない人たちはそこから話が全く進まない。学生や若い世代の人たちはオンラインの環境が整っているが、そこの環境から外れてしまった人たちは完全に分断され、そこをどのように社会全体として支えていくのかが気になっている。そういう人たちと学び共にあるということについて違う方向から考える必要もあると思う。

○委　員　私は、地域区民センター協議会で平均年齢60代後半の集団で活動しているが、メールも使わない人もいるため、集団として利用しようと思ってもできない。ウィズコロナの時代になると、接触しなくて済むツールはリアルを完全に代替えできないが、便利に使える局面もある。特に高齢者がうまく使えるように巻き込みたい。

○委　員　学校現場では学校という場所が知恵を学ぶ場という認識だ。知恵を学ぶことは、人との結びつきや関わり合いがとても大きいと思う。これから始まっていく学習指導要領は関わり合いを強くしているが、コロナ禍によってそこが脇に置かれてしまっている。ハイブリッド的な融合性をどう考えるかとても大事だ。もう一つ、子どもたちはＩＣＴ使用が当たり前の社会の中で生活している。そんなものがなかった時代に生まれてきた僕らが論理でもって考えては良くないのではないか。二、三年前に電車の中で目の前に座っている2人がスマホを持って、ＬＩＮＥで会話を打ち合っている。時折顔を見合わせてにっこり笑い合う。何でしゃべらないのか？今の子供たちはその仕組みは当たり前で、我々からすると異次元の世界だ。そこの乖離している部分を子供たちの未来を考えたものに頭の中をシフトしていかないといけない。学校が本当にこれからも必要かという議論もこれを契機にきちんと進めていかないと、気づいた時には後の祭りということになりかねない。

○委　員　教育現場でＩＣＴ技術の利用に関して、ネット情報会社は教育を巨大な市場と捉えている。テストだといいながらそこに参加した子どもたちの位置情報やインターネット閲覧情報などの個人情報を全部集める。私たちが知らないうちに子供たちのプライバシーを丸裸にし、なおかつ教育の効果を図る。そういうことをやってしまう恐ろしさを感じた。

○委　員　先ほどの学校の話で、子どもたちは既にオンラインの世界で知ら

ない人や海外の人と繋がり、コミュニケーションをし、完全に我々と生きた時代が違う人々である。電車で隣同士に座っていた２人は、ＬＩＮＥのグループで話しているのではないか。子どもの方が個人情報のことをよく知っている。教えてもらうのは我々であってそれを自覚することがポイントではないか。

○議　長　ありがとうございました。では、最後のまとめで課長から一言お願いしたい。

○生涯学習推進課長　貴重なご意見ありがとうございました。オンラインだけではなくオフラインでもどれだけできるのか工夫して考えていきたい。

○議　長　これで今日の会議を終わりにする。ありがとうございました。